

平成24年度第1回入学試験問題

国

語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

【一】次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本における、室内での履き物を脱ぐ習慣は、なかなか変化しない。このことは、住まいのしきり装置とも深くかかわっている。1日本の住宅の玄関には、いまだに靴を脱いだたきがあり、式台（敷台）こそないが、わずかながらでも上がり框がついている。そこで靴を脱ぐことが暗示されているのである。仮に、玄関のたたきの素材がそのまま居室につながりまったく段差がない場合、どこで靴を脱ぐのかが曖昧になる。

玄関の戸が現在では引き戸ではなく、ほとんどがドアになった。しかし、欧米と同じようなドアでありながら、欧米と異なっているのは、外開きであることだ。ドアを内開きになると、玄関で脱いだ靴がドアを開いたときに引っ掛かってしまうからである。もちろん、ドアが引っ掛からないほどに広い玄関であれば問題はないのだが、それでも外開きにしているのは、靴脱ぎの習慣があるからだ。

わたしたちは、靴（履き物）を脱ぐことで、外部から内部に入ったと無意識に感じている。もちろん、現在では公共的な建物や商業的な建物では、室内でもほとんどが靴を脱がないようになっていて、靴を脱がない室内空間は、いわばパブリックな場であるとわたしたちは認識している。住まいから一歩外に出ると、パブリックな空間である。それは道路からオフィスや商業施設などへとつながっている。そうしたパブリックな空間から帰ってくると、再び、靴を脱ぐ。住まいでは、ほとんどが靴を脱ぐ。したがって、ある住まいから他の住まいへ行くときも、途中のパブリックな空間は靴を履いて歩いていく。靴はまるで、パブリックな空間を渡っていく船である。

わたしたちは、屋外にいても履き物を脱ぐことがある。たとえば、花見のゴザやそのほかの敷物の上では履き物を脱ぐ。現在では、花見は、段ボールの敷物というのが少なくない。それでも段ボールの上では履き物を脱いでいる。屋外に敷物を敷くことは、日本ばかりではなく、欧米でも行われる。敷物の上で食事をするピクニックのシーンを映画などで目にする。しかし、欧米では敷物の上で靴を脱ぐということはなさそうだ。わたしたち日本人にとっては、段ボールも畳に代わるものとして意識されているのである。敷物一枚であっても、それによってしきられた場所は、ただの屋外ではなく、座敷のようになる。

履き物を脱ぐことには、外の汚れを部屋（内）に持ち込まないという気持ちが微妙に働いている。外よりは、土間の方が上位であり、清潔であり、土間よりも板の間の方が上位であり清潔である。そして板の間よりも畳の間の方が上位にあり清潔だ。こうした感覚は、たとえば、近代になってからのことだが、板の間ではスリッパのような上履きを使うが畳の間ではそれを脱ぐといった習慣にもそうしたしきり意識を見ることが出来る。また、部屋にも座敷、廊下、台所、風呂、トイレなどに上下のしきり意識がある。現在でも、トイレではスリッパやサンダルを履き替える習慣を残している公共施設がある。トイレのスリッパやサンダルは、おそらく、古くからある下駄のような高足駄の習慣からきているのだろう。平安時代の絵巻物『餓鬼草紙』には、高足駄をはいて排泄する場面が描かれている。この履き物は、歩かための履き物ではない。不浄な場所では特別な履き物を履くという感覚がそこには見られる。

ともあれ、外から内に入った時に、履き物を脱ぐことは、清潔感や汚れ、あるいは浄不浄感とかかわっている。靴を脱ぎ部屋に入り、スリッパを履き、そして畳の部屋ではスリッパも脱ぐ、さらに時としては、トイレで専用の履き物を履く。こうした感覚は、欧米人にはなかなか理解できないかもしれない。

*

日本人にとつての履き物に対する意識は、いったいどのようなものなのだろう。履き物に関連するいくつかの言葉を見ておこう。

下駄は、明治以前ではさほど一般的な履き物ではなかったのかもしれない。たとえば、柳田国男は『明治大正史』でかつて下駄は「褌にも晴にも一度でも公認せられたことの無い履物であったが、其普及は此の如く顕著であったのは、やはり亦足を汚すまいとする心理の表われであった」（『定本柳田国男集』第二四巻）と述べている。草履や草鞋が一般的な履き物だったのである。たしかに、下駄は、石ころだらけの道は歩けない。してみれば、下駄は、舗装道路に合っ

た履き物のようにも思える。

「下駄を預ける」とか「下駄をはかせる」といった表現は、さほど古いものではないのかもしれない。とはいいつつも、「下駄を預ける」という表現は、**A**「**〆**」といった意味をふくんでおり、わたしたちの履き物に対する古くからの感覚をどこかに残しているように思える。履き物を預けるというのは、室内領域を出て勝手にどこかに行くことはできないという状態だ。だから、「下駄を預ける」という表現には、「相手を油断させる」という意味が隠されている。つまり履き物は、囲い込まれた室内という領域から、自らの主体性によって出ていくことのできる状態を保証するものといった意味がある。さらにいうなら、履き物は、自らの主体性で、ある境界（しきり）を自在に行き来することのできることを可能にするものだといえるだろう。

下駄よりも一般的な履き物である「草鞋」にかかわる表現としては、「草鞋を脱ぐ」というのがある。博徒などが、地域の親分などの家に一時、身をあずける（落ち着ける）といった意味だ。つまり、履き物が身を預けることとかかわっており、ある領域（縄張り）内からことわりなしには出ていかない状態であることを意味する。ある領域（縄張り）とは、やはり「しきり」のある領域であるから、履き物は「しきり」とかかわっていることになる。

また、「草鞋金剛」というのがある。これは、かかとの部分を意図的に未完成のままにした巨大な草鞋を、村境（これもしきられた場である）などに片方だけ吊しておくもので、悪病除けのまじないである。一説には、巨大な草鞋をはく大きな人がいるという威嚇であるともいう。それにしても、村境に片方だけの草鞋をまじないとして置くということも、履き物がしきり空間とかかわっているということなのだろう。

黒田日出男は履き物を脱ぐということについて、興味深い指摘をしている。

【「道を行く旅人がはきものを脱ぐのは、宿に着いたときだけではなかった。

すなわち、ある場合には象徴的に沓を脱ぐ行為がなされた。それが『沓掛』である。地名として有名なのは長野県の沓掛であるが、もとよりそこだけではない。地名事典を引けば、全国の各地に『沓掛』が分布していることを確認できる。

『沓掛』とは、

『元来、峠の入り口に祭る山の神や道祖神などに、馬の沓や草鞋を掛けて奉納し、祈願する習俗』

に由来している地名なのである。つまり、『沓掛』は峠や山道を無事に通れるように神に祈願する行為として考えられる。

道というのは、決して均質でのっぺらぼうなものではない。道にはさまざまな境・仕切りがある。国・郡の境、荘園や村の境、平地と山間部の境……といったように、さまざまな境界があった。そうした境を越えるとき、人々ははきものを脱ぎ、それを木に掛けるなどして無事な通過を祈願したのである。

草鞋を脱ぐことは、そうした道の境を越えるための象徴的行為なのであり、旅人は、それを行うことによって道を旅することができたのであった」（黒田日出男「道で沓を脱いだ人々」）

履き物を脱ぐことが、わたしたちの生活の中では象徴的な行為であるというのである。さらに、「日々、われわれはなにげなしにはきものを履いたり脱いだりしている。しかしそれは、本来的に越境のための象徴的作法なのである」と黒田は結論している。履き物は、やはり「しきり」を越えることと深くかかわっているらしいのである。ということ

は、家の中に入る時に、履き物を脱ぐのは、やはり決定的な「しきり」を越えていく行為としてあるのではないか。

B

わたしたちにとって、もつとも大きな境界とは、**B**との境界である。この大きな境界を越える時も、わたしたちはやはり履き物を脱ぐことになっている。「畳の上で死にたい」という言葉があるが、それは履き物を脱いだ状態である。履き物を脱ぐことで浄土に行くことができるのだろう。死ぬ時には、履き物を履いていないことが望ましい。しかし、棺桶の中には、履き物を入れる。この習慣がいつ頃からはじまったのかはわからないが、これは「三途の川」（賽の河原）などの浄土にいたる冥途の旅が待ちかまえているからだ。旅をするには履き物が必要という配慮か

ら、棺桶の中にそれを入れる。しかしながら、「阿弥陀来迎図」を見ると、阿弥陀如来もその周辺にいる菩薩も履き物を履いてはいない。浄土では、再び履き物を脱ぐのだろう。浄土ということでは、履き物は、やはりどこかで浄不浄や汚れの感覚とかかわっており、それが、今目的には清潔感とかかわっているのだろう。

(柏木博の文章による)

問1 線1「日本の住宅の玄関には、()上がり框がついている」とありますが、筆者は、玄関で靴を脱ぐことには、ある「しきり意識」が働いていると考えています。その「しきり意識」とは、どのようなものですか。＊以前の文章より二点指摘し、それぞれ十五字以上二十字以内で答えなさい。

問2 線2「そこ」の内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 上下のしきり意識
- イ 平安時代の絵巻物『餓鬼草紙』
- ウ 歩くための履き物でないということ
- エ 家のトイレで専用の履き物を履くこと
- オ 公共施設のトイレでスリッパやサンダルを履き替える習慣

問3 Aにあてはまる「下駄を預ける」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 保管させる
- イ 相手の裏をかく
- ウ 相手に一任する
- エ 自由に行き来する
- オ 自分の思い通りにさせる

問4 黒田日出男の文章を引用した部分(一)は、本文においてどのような役割を果たしていますか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 柳田国男の『明治大正史』で示された考察に疑問を投げかける形で『沓掛』の習俗を紹介し、日本人にとっての履き物の多様性を強調している。
- イ 『明治大正史』における下駄の意味付けとは異なる視点から草鞋について分析することで、柳田とは異なった履き物に対する考えを提示している。
- ウ かつて全国に見られた『沓掛』の習俗を詳しく紹介することで、日本人の履き物に対する感覚が歴史とともに変化してきたことを表そうとしている。
- エ 全国各地に分布する『沓掛』の地名の由来となったかつての旅の習俗を説明することによって、日本人の履き物に対する意識を歴史的に裏付けている。
- オ 今も残る『沓掛』という地名に表れているかつての習俗を紹介することで、履き物を大切にした日本人にとっての旅の果たした意義を示そうとしている。

問5 Bに最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 浄と不浄 イ 公と私 ウ 天国と地獄 エ 冥途と浄土 オ この世とあの世

問6 日本人にとって履き物とはどのようなものだと述べられていますか。次の□に最もふさわしい三字以内のことばを文中より探し、書き抜きなさい。

日本人にとって履き物とは、(三字以内)を可能にするものである。

問7 次の中から本文の内容と合っているものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア トイレのスリッパをそのまま廊下で履くことは欧米人には理解できない感覚だ。
- イ 日本人は何気なく靴を脱いだり履いたりしているが、それは伝統や文化と関わっている。
- ウ 「草鞋金剛」のような巨大な履き物を境に吊す作法は、「賽の河原」を越える時にも行うとされている。
- エ 下駄は古くから日本人にとって一般的な履き物であり、それにまつわる様々な慣用句が今日に残っている。
- オ ピクニックなどで欧米人が敷物の上でも靴を脱がないのは、彼らが玄関で靴を脱がないのと同様の感覚による。

【二】次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「誰ださつきからべちゃべちゃとしゃべっているのは？ 誰だ？」

と、とうとう彼は我慢がし切れなくなつて、こういいながら籐の鞭でびしッと机の板を叩いた。

「沼倉！ お前だろさつきからしゃべっていたのは？ え？ お前だろ？」

「いいえ、僕ではありません。……」

沼倉は臆する色もなく立ち上がつて、こう答えながらずっと自分の周囲を見廻した後、

「さつきから話していたのはこの人です」

と、いきなり自分の左隣に腰かけている野田という少年を指さした。

「いいや、先生はお前のしゃべっているところをちゃんと見ていたのです。お前は野田と話をしていたのではない。お前の右にいる鶴崎と二人でしゃべっていたのだ。なぜそういう嘘をつくのですか」

貝島はいつになくムカムカと腹を立てて顔色を変えた。なぜかというのに、沼倉が自分の罪をなすりつけようとした野田という少年は、平生から「オンコウ」な品行の正しい生徒なのである。野田は沼倉に指さされた瞬間、はっと驚いたような眼瞬きをして、憐れみを乞うが如くに相手の眼の色を恐る恐る窺っていたが、1やがて何事かを決心したように、真つ青な顔をして立ち上がると、

「先生沼倉さんではありません。僕が話をしていたのです」

と、声をふるわせていった。多勢の生徒は嘲るような眼つきをして一度に野田の方を振り返った。

それが貝島にはいよいよ腹立たしかった。野田はめったに教場の中で無駄口をきくような子供ではない。彼は大方、この頃級中の餓鬼大将として威張っている沼倉から、不意に無実の罪を着せられて、抛ん所なく身代わりに立ったのだらう。もしも罪を背負わなかったら、後で必ず沼倉にいじめられるのだらう。そうだとすれば沼倉は尚更憎むべき少年である。十分に彼を詰問して、懲らしめたうえでなければ、このまま赦す訳にはいかない。

「先生は今、沼倉に尋ねているのです。外の者はみんな黙っておいでなさい」

貝島はもう一遍びしりツと鞭をはたいた。

「2 沼倉、お前はなぜそういう嘘をつくの。先生はたしかにお前のしやべっているところを見たからいうのです。自分が悪いと思ったら、正直に白状して、自分の罪をあやまりさえすれば、先生は決して深く叱言をいうのではありません。それだのにお前は、嘘をつくばかりか、却って自分の罪を他人になすり付けようとする。そういう行いは何よりも一番悪い。そういう性質を改めないと、お前は大きくなってからロクな人間にはならないぞ」

そういうわれても、沼倉はビクともせず、例の沈鬱な瞳を据えて、上眼づかいに貝島の顔をじろじろと睨み返している。その表情には、多くの不良少年に見るような、意地の悪い、胆の太い、獰猛な相が浮かんでいた。

「なぜお前は黙っているのか。先生の今いったことが分からないのか」

貝島は、机の上に開いておいた修身の読本を伏せて、つかつかと沼倉の机の前にやって来た。そうして、飽くまでも彼を糺明するらしい氣勢を示しながら、場合によっては体罰をも加えかねないかのように、両手で籐の鞭をグツと撓わせて見せた。生徒一同は俄に固唾を呑んで手に汗を握った。何事か大事件の突発する前のような、さつきとは意味の違った静かさが、急に室内へしーんと行き亘った。

「どうしたのだ沼倉、なぜ黙っている？ 先生がこれほどうのに、なぜ強情を張っている？」

貝島の手が満を引いている鞭が、あわや沼倉の頬ッぺたへ飛ぼうとする途端に、

「僕は強情を張るのではありません」

と、彼は濃い眉毛を一層曇らせて、低くかすれた、同時にいかにも度胸の据わったしぶとい声でいった。

「話をしたのはほんとうに野田さんなのです。僕は嘘をいうのではありません」

「よし！ こっちへ来い！」

貝島は彼の肩先をムズと驚掴みにして荒々しく引き立てながら、容易ならぬ気色でいった。

「こっちへ来て、先生がいいというまでその教壇の下で立っていなさい。お前が自分の罪を後悔しさえすれば、先生はいつでも赦してあげる。しかし強情を張っていれば日が暮れても赦しはしないぞ」

「先生、……」

と、その時野田がまた立ち上がっていった。沼倉は横目を使って、素早く野田に4一瞥をくれたようであった。

「ほんとうに沼倉さんではありません。沼倉さんの代わりに僕を立てて下さい」

「いや、お前を立てる必要はない。お前には後でゆつくりいつて聞かせます」

こういつて貝島は、遮二無二沼倉を引き立てようとすると、今度はまた別の生徒が、

「先生」

と、いつて立ち上った。見るといたずら小僧の西村であった。その少年の顔には、平生の腕白らしい、鼻ったらしのやんちゃらしい表情が跡かたもなく消えて、十一、二の子供とは思われないほど真面目くさった、主君のために身命を投げ出した家来のような、犯し難い勇気と覚悟とが閃いているのであった。

「いや、先生は罪のない者を罰する訳にはいきません。沼倉が悪いから沼倉を罰するのです。叱られもしない者が余計なことをいわぬがいい！」

貝島はかあッとなった。どうして皆が沼倉の罪を庇うのだから分らなかった。それほど沼倉は、常に彼等を迫害したり威嚇したりしているのだとすれば、ますますもって怪しからんことだと思った。

「さあ！ 早く立たんか早く！ こっちへ来いというのになぜ貴様は動かんのだ！」

「先生」

と、また一人立ち上がったものがあつた。

「先生、沼倉さんを立てせるなら僕も一緒に立たして下さい」

こういつたのは、驚いたことには級長を勤めている秀才の中村であった。

「何ですと？」

貝島は覺えず呆然として、掴んでいる沼倉の肩を放した。

「先生、僕も一緒に立たせて下さい」

つづいて五、六人の生徒がどやどやと席を離れた。その尾について、次から次へとほとんど全級残らずの生徒が、bイクトウオンに「僕も僕も」といいながら貝島の左右へ集まって来た。彼等の態度には、少しも教師を困らせようとする悪意があるのではないらしく、ことごとく西村と同じように、自分が犠牲となつて沼倉を救おうとする決心が溢れて見えた。

「よし、それなら皆立たせてやる！」

貝島は痛癢と狼狽の余り、もう少しで前後の分別もなくこう怒号するところであつた。もしも彼が年の若い、教師としての経験の浅い男だったら、きつとそうしたに違いないほど、彼は神経を苛立たせた。が、そこはさすがに老練をもつて聞えているだけに、まさか尋常五年生の子供を相手にムキになろうとはしなかつた。それよりも彼は、5沼倉という一少年が持つている不思議な威力について、内心に深い驚愕の情を禁じ得なかつたのである。

「沼倉が悪いことをしたから、先生はそれを罰しようとしているのに、どうしてそんなことをいうのですか。一体お前たちはみんな考えが間違っているのです」

貝島はさも当惑したようにこういつて、仕方なく沼倉を懲罰するのを止めてしまった。

その日は一同へ叱言をいつて済ませたようなものの、以来貝島の頭には、沼倉の事が一つの研究材料として始終想い出されていた。小学校の尋常五年生といえ、十一、二歳の頑固でない（幼くて善悪をわきまえない）子供ばかりである。親の意見でも教師の命令でもなかなかいう事を聴かないで暴れ廻る年頃であるのに、それが揃つて沼倉を餓鬼大将と仰ぎ、全級の生徒がほとんど彼の手足のように動いている。沼倉が来る前に餓鬼大将として威張り散らしていた西村は勿論のこと、優等生の中村だの鈴木だのまでが、懼れているのか心服しているのか、とにかく彼の命令を遵奉して（固く守つて）、この間のように沼倉の身に間違ひでもあれば、自ら進んで代わりに体罰を受けようとする。沼倉にどれほど強い腕力や胆ツ玉があるにもせよ、彼とてもやつぱり同年配の鼻つたらしに過ぎないのに、「先生がこういつた」というよりも、「沼倉さんがこういつた」という方が、彼等の胸には遥かに恐ろしくピリツと響くらしい。貝島は永年の間小学校の児童を扱つて、随分厄介な不良少年や、強情な子供にてこ擦つた覚えはあるが、これまでにまだ沼倉のような場合を一遍も見ただけはなかつた。その子がどうしてかくまでも全級の人望を博したのか、どうして五十人の生徒をあれほどみごとに威服させたのか、それはたしかに多くの小学校において、余り例のない出来事であつた。

全級の生徒を懾服させて（恐れ従わせて）手足の如く使うということ、単にそれだけのことは、必ずしも悪い行いではない。沼倉という子供にそれだけの徳望があり、威力があつてそうなつたのなら、彼を叱責する理由は毛頭もない。ただ貝島が怖れたのは、彼が稀に見る不良少年、——とても一筋縄では行けないような世にも恐ろしい悪童であつて、そのために級中の善良な分子までが、心ならずも圧迫されているのではないだろうか、追い迫いと自分の勢力を利用して、悪い行為や風俗を全級に流行させたり教唆したりしないだろうか、——ということだつた。あれだけの人望と勢力をもつて、級中に悪い風儀をはやらせられたらそれこそ大事件であると思つた。しかし、貝島は、幸い自分の長男の啓太郎が同じ級の生徒なので、それとなく様子を聞いてみると、だんだん6彼の心配の杞憂に過ぎない事が明らかになつた。

「沼倉ッという子は悪い子供じゃないんだよ、お父さん」

啓太郎は父に尋ねられると、しばらくモジモジして、それをいつていいか悪いかと迷いながら、ポツリポツリと答えるのであつた。

「そうかね、ほんとうにそうかね、お前の云付け口を聞いたからといって、何もお父さんは沼倉を叱る訳じゃないんだから、ほんとうのことをいいなさい。この間の修身の時間のことは、あれは一体どうしたんだ。沼倉は自分で悪いことをしておきながら、野田に罪をなすり付けたりしたじゃないか」

すると啓太郎は下のようなcペンカイをした。——あれは成程悪い行いには違ひない。けれども沼倉は格別人をd陥れようなどという深い企みがあつたのではなく、実は自分の部下の者（即ち全体の生徒）が、どれほど自分に心服

しているか、どれほど自分に忠実であるかを試験するために、わざとあんな真似をやったのである。あの日のあの事件の結果として、沼倉は、級中の総ての少年が一人残らず彼のために甘んじて犠牲になろうとしたこと、そうしてさすがの先生も手の出しようがなかったことを、十分にたしかめ得たのである。当時彼の指名に応じて、第一に潔く罪を引き受けようとした野田や、野田の次に名乗って出た西村や中村や、この三人は中でも忠義第一の者として、後に沼倉からその殊勲を表彰された。――啓太郎の話す意味を補ってみると、大体こういう事情であるらしかった。

(谷崎潤一郎『小さな王国』より)

問1 ――線 a・b・c のカタカナを漢字に直し、d の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問2 ――線1「やがて何事をか決心したように」とありますが、野田は何を決心したのですか。十字以上十五字以内で答えなさい。

問3 ――線2「沼倉、お前はなぜそういう嘘をつくのです」とありますが、沼倉が嘘をついた目的が書かれている部分を五十字以上五十五字以内で探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。

問4 ――線3「固唾を呑んで」・4「一瞥をくれた」の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

3 ア 居住まいを正して イ 恐怖におびえて
ウ 息をとめ緊張して エ 驚いて一瞬息をとめて

4 ア 注意を与えた イ ちらつと見た
ウ 助けを求めた エ さつとにらんだ

問5 ――線5「沼倉という一少年が持っている不思議な威力」とありますが、これはどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 貝島先生よりも沼倉に従いたい、と思わしてしまうような人間的な魅力と威圧感。
イ 嘘を付くのがとてもうまく、友人はもとより先生も操ることができる能力と威圧感。
ウ 睨まれたら何をされるか分からないので従っておこう、と思わせてしまう獰猛さと威圧感。
エ 陰湿で底意地も悪いので決して逆らうことはできない、と思わせてしまう人間性と威圧感。

問6 ――線6「彼の心配の杞憂に過ぎない事が明らかになった」とありますが、この時の貝島の気持ちを五十字以上五十五字以内で答えなさい。

「以下余白」

問 1

[illegible]

15

2

[illegible]

15

問
2

101

問
3

11

問
4

7

問
5

10

問
6

問
7



二
問
1

a
b
c
d
れ

れ

問
2

0

10

問
3

S

問
4

3
4

問
5

11

問
6

A blank coordinate grid for plotting. The vertical axis (y-axis) is on the left, with the origin labeled '0' and the bottom labeled '55'. The horizontal axis (x-axis) is at the bottom. The grid is composed of 10 columns and 11 rows. The origin is marked with a small circle.

50

55

合計

小計

小計

受験番号

氏 名

受験番号は算用数字で横書きにすること